

13 カキ産地の維持(意地)と生き残りに向けて ～大幅な生産量減からの復旧・復興～

■ J A 香川県綾歌南部柿部会 ■

(中讃農業改良普及センター 山口 登)

●対象の概要

綾歌南部のカキ産地は綾川町の旧綾南町千疋地区から、旧綾上町山田地区へと続く中山間部が主な産地(綾川町昭和地区、丸山岡パイロット、山田地区)である。標高150~300mの小高い山に囲まれた丘陵地帯で、緩やかな傾斜地の園地が多く、東西に洪積層が走り、ほとんどの園地土壌は粘土質である。

気候も平均気温が約15℃と温暖で、内陸部的な日温度較差も伴い、カキの栽培に好適であり、「味」と「品質」の良さは定評を得ている。

当部会の栽培面積は40ha(県内:220ha)、生産量は232t(452t)、栽培者数80人(183人)と県内有数の産地である。

●課題を取り上げた理由

平成22年産は春先の晩霜害等異常気象で生産量は平年の7割、平成23年産も開花時期の天候不順が受粉不良型生理落果を助長したほか、灰色かび病、炭そ病が多発し気象条件が非常に悪かったため、再々の防除も効果が得られず生産量は平年の4割に止まった。

そのため、個々の農業経営の悪化や選果場の老朽化など産地機能維持の危機感が漂う中、市場関係者や消費者の信頼回復と農家経営の立て直しのため、安定した生産量の確保および収益性の向上が緊急な課題となっていた。

●普及活動の経過

1 大幅減収対策検討会を関係機関が連携して開催(平成24年~)

- (1) 平成23年産生育概況(府中果樹研究所)
- (2) 販売状況及び県外産地状況(JA香川県)
- (3) 生育概況と作柄・指導経緯(普及センター)
- (4) 病虫害発生の特徴および薬剤感受性(中間)評価(防除所)
- (5) 現地の防除実績について(農業経営課)
- (6) 本年度の大幅減収に関する原因解析
- (7) 今後の生産対策について

2 産地(生産者)総出の徹底した生産対策

(1) 生産安定対策として、確実な受粉の実施

雄樹の伐採中止、受粉樹の高接ぎ(さえふじ)、ミツバチの放飼(メガサイズ)箱の増加。早秋の着果安定のための植調剤処理の徹底などを実施した。

(2) 排水性強化と健全な園内環境の確保

有機物投入と中耕の実施による土壌構造の改善のほか、排水性向上の明渠、反射マルチによる地表水の排水促進(太秋)、枝の徒長防止のための施肥改善(減肥)と剪定改善、剪定枝の完全な除去など園内環境の整備を推進した。

(3) 高効果な防除方式、防除暦の見直し

薬剤混合順位の徹底、スピードスプレーヤ走行ルートと散布量の改善、期間内一斉適期防除、異常気象に対応した応急防除、虫媒受粉に対応した開花期の薬剤変更、浸透移行性殺菌剤の追加見直しなどを実施した。

(4) 高齢化など有限労働力での高収益化(図-1)

樹高切下げ、一枝一蕾など適正着果数厳守による大玉果生産と作業労働の省力化を図った。

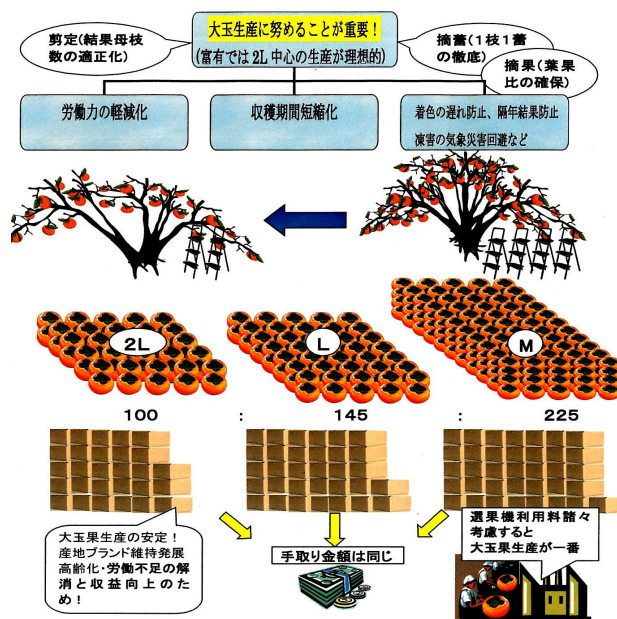


図-1 高齢化など有限労働力の高収益化概念

(5)産地ブランドの確立と有利販売に向けた商品量の拡大など売れるカキへの挑戦

「千疋の柿」(太秋と富有)

一万本の樹から、100本を厳選し、更に天成りの柿(木の上部、日当たり良好な位置の柿)の中の更に5%しか収穫できない極上品を千疋の柿として継続出荷した。



「千疋の柿」(太秋と富有)

「太秋」

食感が魅力の、「太秋」を日本一早く市場へ出荷。従来の柿の着色概念を変える緑色、消費者が欲しい・美味しいとあれば、市場関係になんと言われても消費者ニーズ本意の姿勢を継続した。

「太秋かきのタマゴ チビ太くん」

雄花の小さな実「太秋かきのタマゴ チビ太くん」(以下チビ太、商標登録申請中:JA)を5年前から本格的に出荷継続。収穫量に年次変動はあるが、高単価で取引中。

「袋かけ」

手間暇な袋かけの高品質果実生産を継続。

「冷蔵柿」

年末・年始の出荷販売期間の延長と生産量の増産・価格対有利販売等に向けた新たな取り組みも始めた。

3 関係機関連携による生産対策支援

(1) 病害虫防除研修会、炭そ病枝部位発生率、カキノヘタムシガ発生予察調査、適期防除残効試験など(府中果樹研究所、中讃普及協議会、柿部会調査協力)

(2) 炭そ病薬剤感受性試験評価、フジコナカイガラムシ発生調査、病害虫発生予察調査の強化、収穫前防除追加薬剤試験など(防除所、柿部会調査協力)

(3) 選果処理能力強化:補助事業活用による新選果機の導入(JA 香川県、綾川町、県農業生産流通課)

主力品種収穫期の選果における過剰労働の集中を軽減した。

(4) 栽培モデル園設置(当部会、JA、昭和小)

目に見える栽培管理モデルの位置づけとし、栽培管理、新農薬効果展示、カラス被

害防止展示などのPRや特産品として地元小学生への食育とし生育観察・収穫体験などのため設置した。



地元小学生の食育一環 生育観察・収穫体験

●普及活動の成果

- 1 農業普及の機能は産地(農業者)へ単なる情報伝達ではなく、改善に向けた過程を容易にすることに考慮した。
- 2 農業者や関係機関担当者とのコミュニケーションを活性化し、農業者の課題解決支援のために普及過程において農業者と関係機関間の相互作用を積極的に促すよう努めた。
- 3 カキ部会の販売量が過去10年間歴代1位、販売金額2位(平成18年産以来)となった。
大玉2L以上62%(L以上89.2%)の新記録。

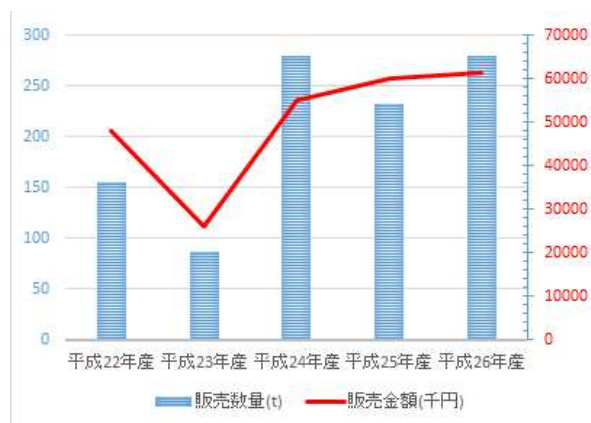


図-2 カキの年次別販売実績

●今後の普及活動の課題

今後も、作業労働力の省力化の一環として、樹高切下げや高所作業車の導入を促進し収穫に極力脚立を用いない栽培方法を誘導し、さらには経営規模の拡大へ誘導を図る。

また、異常気象にも即応可能な機動性の高い防除組合等による一斉共同防除の徹底継続と全生産者への周知システムの改善を図る等により担い手の維持・確保に努めたい。